文化資料館調査研究報告(21)：91-102, 2012

郷土史家・野崎薫ノート

付、郷土史ゆかりの人々

平山　孝通(*1)

1　はじめに

きわめて個人的なことから記す。筆者は平成24年(2012)3月に定年退職をむかえる。昭和50年(1975)4月1日の入所以来37年間、公私ともに大変お世話になったことに心よりお礼申し上げたい。以前ならば、諸先輩と同様に新しく充実した生活が開始されるはずであったが、昨今の経済状況で、まだ数年はいまの職場でお世話になる所存である。変わらぬご指導・ご鞭撻を賜りたい。

このような個人的な環境や心持ちの変化の中で、いま一度茅ヶ崎の郷土史、茅ヶ崎の地域史に立ち向かう方法論を模索している。まずは研究の軌跡を振り返り、その中に今後の方向を探りたいと考えた。

手許の「茅ヶ崎市史文献目録」(『茅ヶ崎市史研究』および『ヒストリアちがさき』に収録、全36点)収録の8，000点余の論文や報告文を検討し、その1点1点が、市域の歴史的事実を明らかにする貴重な研究であるとあらためて認識できた。

とくに論文を多く執筆された郷土史家・野崎薫氏の生き方や研究方法から何かを学べると考え、氏の研究を辿ってみた。

2　野崎さんのこと

さて、野崎薫茅ヶ崎郷土会第５代会長（萩園出身）を知る人は年とともに少なくなっている。氏の郷土会会員、理事、副会長、会長および顧問としての郷土会や郷土史研究への貢献は多大なものがあり、筆者も度々ご指導をいただいた１人として心より感謝している。

平成２年（1990）８月５日に農協ビル大ホールにおいて氏の「米寿を祝う会」が開催された。参加者に配布された『野崎薫さんの米寿を祝う会、記念誌』収録の「著作目録」には、今日でも必見の論文や報告文が多数記されている。小論はその「著作目録」の増補改訂を目的としたが、結果として研究史の資料となった。（なお、『記念誌』には世話人25人と当日の参加者 130 余人の名簿、欠席者のメッセージ40 余通、「編集にあたって」が掲載されている。会の開催には岡崎周氏の関与が大きい。）

氏が編集や執筆に関与した書籍は『藤間善一郎、追悼集』(昭和46)、『ふるさとの寺と仏像』(52・2)、『萩園の地名』(57・6)、『ふるさとの歴史散歩』(58・6)、『農協ちがさき、続連載記事集録版』(61・7)、『満福寺誌』(62・4)、『満福寺誌、追補』（63・8)、『安らかに、野崎安子追悼集』(平成 1・1)、『ふるさとの緑を訪ねて』(2・4)、『華のうてな（菊地正平遺稿集）』(3・2)、『萩園のうつりかわり』（5・5）の 11 冊を数える。郷土会会員のなかでは多い方と思われる。

『ふるさとの寺と仏像』では市域の全ての寺院と仏像の写真を鑑賞できる。『ふるさとの歴史散歩』は市内に点在するほぼ全ての史跡を詳細に解説している。巻末の索引は労作である（なお、『ふるさとの歴史散歩』は平成11年9月の在米史料調査のおり、ワシントンDCの米国議会図書館本館で史料の検索中に、その所蔵を確認した）。『萩園のうつりかわり』は、氏のふるさと萩園の歴史事典で、図書館の司書や市史編さん担当者の郷土史のレファレンス業務における必備の書といえる。また、その編著書の多くの「題字」は郷土人としての深い絆であろうか、高田出身の書家、茅村・水越咲七氏の手に成るものが多く、その装丁は優美である。

また、野崎氏の論文執筆においては郷土会会員・塩原富男氏の献身的な協力は忘れられない。野崎氏の晩年の原稿や写真の整理への貢献は頗る大きく、塩原氏への感謝の思いは深かったと思われる。

まずは「略歴」で氏の足跡を振り返ろう。

略 歴

明治 35 年（1902）7 月 26 日、神奈川県高座郡鶴嶺村萩園(現、茅ヶ崎市萩園)に野崎善太郎・タ子（たね）の長男として生まれる。

明治 42 年（1909）4 月～大正 4 年（1915）3 月、茅ヶ崎町立尋常高等鶴嶺小学校の 1 期生として在学する。

大正 11 年（1922）12 月～同 13 年 11 月、北朝鮮で現役兵として従軍する。（20～22 歳）

除隊後、農業経営に従事し、茅ヶ崎町青年団連合会副会長、萩園消防組小頭、実行組合長など青年団活動、自治活動に参画する。方面委員(後の民生委員)にも委嘱される。篤農家にも興味を示し、併せて郷土史研究にも興味を持った。

昭和 20 年代半ば、茅ヶ崎郷土研究会が創立され、会員となる。（40 代半ば）

昭和 40 年（1965）、茅ヶ崎郷土研究会が茅ヶ崎郷土会と改称され、理事に選出される。（63 歳）

昭和 43 年（1968）6 月頃、社会福祉の功労で、県民表彰を受ける。（66 歳）

昭和 45 年（1970）5 月、茅ヶ崎郷土会副会長に選出される。（68 歳）

昭和 48 年（1973)11 月、法務行政功労者として、勲五等瑞宝章を受章する。

昭和 52 年（1977)10 月、茅ヶ崎市制施行 30 周年記念表彰を受ける。（75 歳）

昭和 53 年（1978)10 月、萩園・三島神社に「詞碑」を建立する。（76 歳）

昭和 55 年（1980）5 月、茅ヶ崎郷土会第 5 代会長に選出される。（78 歳）

昭和 58 年（1983)～平成 5 年、茅ヶ崎市史編さん委員会委員に委嘱される。

昭和 61 年（1986）4 月、高齢のため郷土会会長を辞任し、顧問に推薦される。（84 歳）

11 月、茅ヶ崎市教育委員会教育功労者の表彰を受ける。

平成 2 年（1990）8 月、「野崎薫さんの米寿と出版を祝う会」が開催される。（88 歳）

平成 5 年（1993)10 月、茅ヶ崎市一般表彰を受ける。（91 歳）

平成 6 年（1994）8 月 15 日、没。満福寺に近い墓地に眠る。（92 歳と 19 日）

この（平成 24 年）8 月で没後 18 年、もしもお元気ならば 110 歳をむかえられる。天界でも多くの先輩方と調査を重ねて、楽しい充実の日々を過ごされておられることと思われる。

筆者も郷土史に興味を持つ 1 人の後学として氏の「著作一覧」を基に郷土史の新たな研究課題を検討したいと考えている。

巻末の「**著作一覧」に**は 93 点（ほぼ没年と同数だが、もっと論考は多いかと思われる。三女克子氏によると昭和 20 年代には三沢善右衛門氏がかかわった地元の新聞に「茅ヶ崎松平」の筆名で、篤農家の列伝を執筆されたことがあり、浜之郷の渡辺家、今宿の古郡家などについて連載されていたという。詳細は不明であるが、その後の氏の農業への姿勢を考えるに若い頃から篤農家に共感し、学ぶ姿を思い浮かべることができる。その後、郷土史の研究に進まれたのであろうか。作家・和田伝などの農民文学にも関心を寄せた時期もあったようである）、**「追悼文等」**は 21 点、**「新聞掲載記事」**は 5 点、**合計 119 点**である。

あらためて研究を振り返って感じたことであるが、その全てが繋がりを持っていることが鮮明である。それぞれの研究で歴史的事項の積み重ねは十分であるが、全体を読み通すと大きな茅ヶ崎の歴史のうねりが感じられた。当然のことながら多くの先輩方の教えを受け、それを基礎にして氏の郷土史研究は始まった。氏の研究がより深められて今日の郷土史研究に携わる人々の成果へと繋がっている。筆者は今後の研究の発展に大きな期待を持ちたいと考えている。

多彩な人脈は「郷土史ゆかりの人々」を参照されたい。郷土史研究の偉大な先達の 1 人である野崎氏の研究を熟読することから始めたい。その主要なものは市立図書館や市文化資料館、社会教育課文化財

保護担当、文化生涯学習課市史編さん担当などで閲覧が可能である。

筆者にとって、啓発的な論文を公表し、「自己学習」「生涯学習」の意欲を引き出す指導をしてくれる人こそ師と呼びたい。

あたり前の小さなことを、毎日コツコツと続ける大切さを教えてくれた野崎氏をはじめ、多くの「郷土史ゆかりの人々」の論文を熟読し、茅ヶ崎市域史研究の再スタートとしたい。

付、郷土史ゆかりの人々

かつて、筆者は野崎氏の郷土史研究の先輩格である鶴田栄太郎氏（円蔵）の「著作目録」を纏める機会を得たが、この２人をはじめとして郷土史研究の先達の研究に学ぶところは多い。郷土会の機関誌『郷土ちがさき』を中心とする多くの「郷土史」に掲載された論文を熟読し、研究のヒントや資料の所在を再度確認したいものである。

まず、13 人の方々の研究や業績を振り返ってみよう（順不同）。

鶴田栄太郎（円蔵）、斎藤昌三（東海岸南）、藤間善一郎（柳島）、小生第四郎（松浪）、山口金次（西久保）、臼井孝之（下寺尾）、水越健（高田）、水越梅二（高田）、水越咲七（高田）、篠田貞太郎（十間坂）、重田景次（十間坂）、水嶋善太郎（小和田）、藁品彦一（円蔵）氏らを対象としたい。

直接的、間接的に各氏は繋がりを持ち互いの研究を深化させている。一例として文化事項の繋がりを斎藤昌三氏の事績を中心に示したい。

①**鶴田栄太郎**氏（円蔵）に関しては、**和田久徳**氏（萩園・茅ヶ崎市史編さん委員・お茶の水女子大学名誉教授）の「鶴田栄太郎氏年譜および著作目録」（茅ヶ崎市史編集員会編『茅ヶ崎市史研究』11、昭和 62 年 3 月、茅ヶ崎市発行）の年譜、著作解説（東哲郎氏担当）、著作目録（226 点）、追悼文等（12 点）が詳しい。また、鶴田氏の「郷土史研究の回顧」（『同研究』12、昭和 63・3）は、昭和 43 年 9 月頃に記された和田氏宛の私信であるが、研究史の参考として掲載された。また、著作目録（16 点）、追悼文等（1 点）の補遺も収録している。号は、あしかび、蘆芽、漁夫山人などと多い。

『相武研究』10-8（昭和 16・8）は、「相模茅ヶ崎史観」と題して戦時下に刊行された。編集の中心を鶴田氏が担い、現在市域の史跡として著名なものには殆ど言及されている。氏の編集された「あしかび叢書」は完結をみなかったものの、その第１篇『大岡越前守墓と浄見寺』（題字は水越茅村氏、昭和 33）は郷土史の代表的著作といえる。大口勇次郎著『ブックレット 12、ちがさきと大岡越前守』（平成 22・3）にも一部引用がある。

有志と活動した下寺尾の「七堂伽藍跡」の保存活動は、地元の新聞にも度々報道され、現在の「七堂伽藍跡」の文化財保護の端緒といえる研究を続けていた。氏を慕いその著作を繙く人は多い。なお、氏の長女は斎藤昌三氏の長男に嫁いでいる。

野崎氏の氏に対する敬慕の念は極めて強かった。

②**斎藤昌三**氏（東海岸南）は、市立図書館名誉館長であり、書誌学者として著名である。図書館に関わりをもつ人々の敬慕はいまでも変わらない。号は少雨叟。図書館の貴重なコレクションの一つである斎藤昌三文庫は郷土史研究の宝庫といえる。とくに『明朗の茅ヶ崎』（昭和 13・8・10～17・3・15、全 45 号）は、戦時下の地域の世相を映す新聞であり、それに連載した「古老に訊く、茅ヶ崎の昔と今」「茅ヶ崎変遷史」（重田景次）などは貴重な証言である。平成 23 年に開催された市美術館の「川上音二郎・貞奴展」でも『明朗の茅ヶ崎』は活用された。

氏に関しては、市文化生涯学習課の辻雅之主任が執筆した「市立図書館『市民文庫斎藤昌三文庫』-書痴 斎藤昌三のコレクション」（『図書館雑誌』103-11、平成 21・11）に詳しい。氏の主たる著作は全集に纏められていて、それを繙く市民は多いという。筆者には以前図書館で開催された「斎藤昌三展」が強く印象に残っている。氏の名誉館長時代に指導を受けた司書らが中心に企画したものである。

さて、文化事業の繋がりを斎藤氏の事績を中心に検討してみよう。

◎斎藤氏を巡る文化事項の繋がり

（**ゴシック体**は文化事項）

さて、斎藤氏が建立に関わった国木田独歩の文学碑を参考に文化の「相関図」をスケッチしてみたい。茅ヶ崎の文化の繋がりを象徴する「文学碑」といえる。

それは、**市営球場**南側に昭和 35 年（1960）6 月に建立された「**国木田独歩追憶の碑**」である。**塩原富男**著**『茅ヶ崎の記念碑』**（**資料館叢書** 10）を参考に検討したい。碑の「**説明板**」は**文化財保護担当**の撰文である。

塩原氏によると、「独歩没後 55 周年を記念して、斎藤昌三氏の発案で、昭和 35 年 2 月に**建立委員会**が発足して 6 月に建立された。題字は**名誉市民**第 1 号の**牧野英一**氏（文化勲章授章者）、プロフィールは地元**南湖**の**三橋兄弟治**画伯が描いた。「独歩」の署名は**自筆**を拡大したもの」である。建立の記念に**絵葉書**が 2 種類発行された。また、毎年**文化人クラブ**を中心に 6 月下旬に碑の前で**追悼祭**が開かれている。

独歩は明治 41 年（1908）2 月に**南湖院**（院長・**高田畊安**）に入院した。見舞いのために多くの文人が茅ヶ崎におりたった。**『二十八人集』**が独歩に献呈されその収入は治療費の一部にあてられた。**真山青果**によって読売新聞に連載された**「独歩氏の近状を報ずる書」**は全国に**茅ヶ崎**の名前を知らしめることとなった。6 月 23 日に没し**六本松**の**火葬場**で荼毘に付され、その夜、海浜旅館**茅ヶ崎館**で**田山花袋・小栗風葉**ら文人による文学史上名高い**追悼の宴**が開かれた。その顛末は花袋の**『東京の三十年』**などが参考になる。月刊文芸誌『新潮』（明治 42 年 7 月号、**独歩追悼特別号**）には、南湖院長・高田畊安と同・**副長中村愛子**の**「病院に於ける独歩氏」**が掲載された。

明治 30 年代には、茅ヶ崎館が**川上音二郎・貞奴**らの台本の読み合わせの舞台となり、台本は**江見水蔭**が執筆した。明治末年に土産品として茅ヶ崎館で発行された**「茅ヶ崎八景」**（絵葉書・**吉岡班嶺**画）は明治の風景を伝える貴重な作品といえる。また、茅ヶ崎館は映画監督の**小津安二郎**らの定宿として**映画**ファンの関心が高く、市内で第 1 号の**登録有形文化財**にも指定された。なお、水蔭は別荘人である考古学者の**坪井正五郎**とは大森貝塚などでの交流もあり、茅ヶ崎での交流の資料を期待したい。

音二郎は**九代目市川団十郎**との繋がりも深く、葬儀時の貢献は大きかった。ゆかりの碑は近年別荘跡地の**団十郎山**に建立され、その地に十二代目市川団十郎丈も親しく足を運んだ。

南湖院に関わる文化人の碑は、川上音二郎・貞奴の屋敷跡地（**万松園**の名は**伊藤博文**が命名した）で、**市美術館**の建つ**高砂緑地**（**原別荘・松籟荘**）に、近年、**平塚らいてう**、**八木重吉の記念碑** 2 基が建立された。さらに「**音二郎没後 100 年・貞奴生誕 140 年記念事業**」の一環として、**音二郎・貞奴の記念碑**が加わった。らいてうと南湖院のゆかりは深い。文芸誌**『青鞜』**の編集の舞台となり、また、らいてうは同人らと**柳島**付近の散策を楽しんでいる。のちに夫となる藤沢出身の画学生・**奥村博**との出会いや**「若い燕」**も忘れられない。その経過はらいてうの自伝**『元始、女性は太陽であった』**などに詳しい。

なお、南湖院で発行された数百枚の絵葉書の資料的価値は高い。記念絵葉書は、**林屋**、**大井写真館**、**茅ヶ崎郷土会**、**市役所**などでも発行している。

柳島村の名主・**藤間柳庵**で著名な**藤間家**は、吉岡班嶺筆の富士の**水墨画**を表装して保存しているが、茅ヶ崎館発行の「茅ヶ崎八景」との関連は如何に、班嶺は茅ヶ崎館や藤間家に逗留して市域を描いたのであろうか。想像すると楽しい。

斎藤氏の立案事業の「独歩の碑」を中心に、茅ヶ崎の歴史を通して点在する文化の多様な繋がりがみえてきた。諸氏の研究を整理して同様の相関図を描けば、大きな輪になる筈である。

独歩追憶碑（建立記念の「絵葉書」より）

③**藤間善一郎**氏（柳島）の業績は、野崎氏が編集の労を執られた『藤間善一郎(追悼集)』(昭和 46)収録の、藤間家の系譜、略歴、主なる事績に詳しい。その人となりは追悼集に記された「晩年郷土史研究に意を注ぎ殊に藤間家に残されていた古文書、民俗資料の整理研究に畢生の努力をされた」との評価に尽きる。藤間家資料が今日まで伝えられた理由の一つは、昭和 41 年の藤間資料館の建設に見ることができる。市域の私設資料館としては唯一のもので、収蔵品の価値は高い。その貴重な資料の多くは『神奈川県史』や『茅ヶ崎市史』、平塚博物館の展示『図録』などに収録された。幕末の名主・藤間柳庵の代表的著作である『年中公触録』と『太平年表録』は「茅ヶ崎市史史料集」として発行され地域史研究に活用されている。その資料保存の基礎を構築されたのが氏であった。同家の資料館には古文書が整然と並んでいるが、その表書きは氏の筆になる。藤間家所蔵の民具の概要は「民具とひと」(『日本美術』昭和 44・5)が参考になる。民具の一部は研究の資料として神奈川県立歴史博物館に長く貸与されて民俗学の研究に寄与している。

服部清道氏との共編『相州砲術調練場編年資料』は鉄砲場研究の基本書といえるが、古書店でも入手が困難なのが惜しまれる。「旧相模川橋脚の詩碑」や「柳島湊」の碑の建立にも尽力した。公職としては、市社会教育委員、文化財保護委員を歴任した。

平成のいまも藤間家の景観はその母屋を含めて、善一郎氏生前の頃と殆ど変わらずに残されている。母屋に関しては、昭和の初期に著名な建築家・西村伊作の設計によって建設されたもので、平成 23 年に『藤間家住宅建築調査報告書』が市景観みどり課によって作成された。文化財的価値は十分有している。

現ご当主やご家族によって古文書、民具は大切に継承されている。その一つとして、『太平年表録』や『雨窓雑書』などの古文書の復刻作業は市域における希有な文化的事業といえる。また、継続的に多くの学友と共に柳庵の研究や顕彰に努められる姿は尊い。平成 20 年には敷地内に「藤間柳庵生誕・終焉の地」の碑が、撰文・藤間雄蔵氏、揮毫・抱旦石井忠氏(茅村氏高弟)によって敷地内に建立された。

なお、善一郎氏は野崎氏の 3 歳年長の明治 32 年の生まれで、相模川左岸水利組合の役員として苦労をした仲という。萩園の野崎氏の家から厚木の事務所へ自転車で向かう 2 人の姿を、三女克子氏は懐かしげに語った。その道すがら当然のことながら、郷土史に関わる会話が続いたと筆者は想像をたくましくしたい。

④**小生第四郎**氏（松浪）は、石川県金沢の出身、本名・弟四郎（ていしろう）。号は「夢坊」（むぼう、ゆめぼう）。浅草に生活して添田唖蝉坊ら文化人と交流を持った。昭和 15 年小和田（現、松浪）に移転し、戦後は市公安委員長、文化会館建設協議会委員などを務めた。昭和 22 年から 23 年にかけて文芸誌「新頁」「社会新聞」などを編集した。当時の世相を伝える得難い資料といえる。「新頁」「社会新聞」は茅ヶ崎市立図書館とアメリカのメリーランド大学のプランゲ文庫にその所在が確認できるのみで、きわめて貴重な出版物である。氏の経歴は『茅ヶ崎市史・現代』3（平成 9・10）収録の「検閲下の出版物」の解説に詳しい。また、『小生夢坊を語る』でも氏の経歴を知ることが出来る。

ご子息・富夫氏によって寄贈された書籍は図書館の貴重なコレクションとして活用が図られている。

お酒を嗜まれた野崎氏は、小生氏の主催する大山の「天狗講」に地域の人と参加することが多く、楽しい利き酒のひとときを過ごされたことと想像できる。後には、主催者の 1 人として富夫氏を支えた。

⑤**山口金次**氏（西久保）は、山口太郎吉氏の五男に生まれ、横浜の洋服店の裁縫部に勤務した。昭和 22、3 年頃に郷土史に興味を持つ地元の有志で会（茅ヶ崎郷土会の前身）を作った。35 年の文化財保護条例制定に伴い文化財保護委員に委嘱され、初代会長に就任した。45 年の市文化資料館の開館に伴い資料収集調査員を、49 年の市史編さん事業の発足に伴い市史史料調査員をそれぞれ委嘱され市域の史料調査に尽力した。これら市の歴史関連事業に指導力を発揮した。後進の指導は現場を何度も訪ねるなど身を

もって示していた。コピー機が希少な時代の資料収集の方法として、反故紙を大切にして、その裏に達筆で写す姿を思い出す。晩年、耳が不自由となったのが惜しまれる。

氏の業績は、『山口金次調査録、茅ヶ崎歴史見てある記』（資料館叢書4、昭和53・2）に纏められた。この出版に寄せる氏の喜びは大きく計り知れないものがある。これには市文化資料館の当時若手の学芸員平野文明・寺井朗雄両氏の力添えが大きく、内容は史跡・文化財編と民俗編の２編に分かれている。没後に纏められた続編といえる『浜降祭』『中原街道界隈』も有益な文献である。しかし、これらに収録していない原稿・草稿類がまだ多数保管されているというが、何れ活用できる日を楽しみにしているのは筆者ばかりではない。昭和50年代後半までの郷土史研究の到達の状況を垣間見ることができる資料群である。

野崎氏は、5歳年長の山口氏を一番の相談相手としていた。また、「足で史料を集める方法」には心より尊敬の念を抱いていたという。

⑥**臼井孝之**氏（下寺尾）は、小出村、茅ヶ崎町、茅ヶ崎市の職員を歴任した。退職後は地元の建彦神社や白峰寺の総代などを務めながら郷土会会員としての研鑽を積み、同会顧問、古文書を読む会会長の重鎮としてその存在は大きいものがあった。市史編さんの史料調査員として小出地区の資料の発掘に貢献した。その論文は米寿を祝う記念誌の『郷土をみつめて』に纏められている。また、地元の小学生などを対象とした史跡の説明会などには積極的に臨み、好々爺振りを発揮していた。

野崎氏と臼井氏は、戦前に町役場の「農繁期託児所」を介して親交を深められたようである。

⑦**水越健**氏（高田）は、「文人であって郷土史家ではない」との評価が鶴田栄太郎氏によってなされた。それは文人が書いた『茅ヶ崎郷土史』（昭和34・9）は読み物としてすこぶる興味深いということであろう。号の「一竿」としての活躍は顕著であり、明治36年頃から俳句雑誌『ホトトギス』に、明治40年頃からは『日本及日本人』『趣味』に度々入選している。俳人としての活躍は『茅ヶ崎市史研究』収録の藁品彦一氏「明治における茅ヶ崎地域の俳句」など一連の論文に詳しい。その選集は次男・梅二氏が『小綬鶏』（平成13・2）と題して刊行した。文芸作品というだけでなく地域の世相を映す得難い資料群ともいえる。郷土史研究においては、全てのものが資料として活用できる例といえよう。残念なことに、その作品はある時多くが焼却されたという。

氏の句碑は、近世の名主屋敷を彷彿とさせる広大な庭の一角に、二男・梅二氏と三男・茅村氏によって建立され、何時までも生家を静かに見守っている。

⑧**水越梅二**氏（高田）に関しては、「水越梅二さんを偲んで」（『ヒストリアちがさき』創刊号、平成21・3）を参照されたい。「略年譜」「著作一覧」が参考になる。長く収入役を務められた氏は地域では長老として尊敬され、97歳の天寿を全うされた。松林地区の「学校」や茅ヶ崎地区の「屋号」の研究に業績を残された。市史編さん委員の副委員長としてその発足時からご指導を賜った筆者としてはその温厚な面影を忘れることが出来ない。ご自身の『歌集 我が遍歴』（醍醐叢書148篇、平成11・7）、祖父・**良介**氏の句集『水越良介遺稿集　塵の外』（12・6）、父・健氏の句歌集『水越健作品集　小綬鶏』（13・2）は「水越家三代集」と銘打ち家族の協力を得てまとめた。娘婿で国文学者の雲英末雄氏の助言は大きかった。氏は茅ヶ崎・寒川短歌会代表委員も務め、歌人として名高く、菩提寺の輪光寺には、四国巡礼結願の歌碑が建立された。

水越ご夫妻は、民生委員としても長年貢献されていたが、野崎氏とはそれを通しての親交が想起される。

氏の思い出を一つ記したい。ご自宅を訪ねたおり、昔入手したものを見せようと出された包みがあった。歌人・長塚節の短冊である。地元の情景を詠んだ氏にとって、農村を舞台に小説を書き、歌を詠んだ節は大きな目標であったであろう。筆者が手にしたアララギ派（短歌結社）の唯一の短冊である。

氏は古典や古書に関する造詣が深く、よく古典を繙かれていた。

⑨**水越咲七**氏（高田）に関しては、「茅村・水越咲七の揮毫を訪ねて」（『文化資料館調査研究報告書』15、平成19・3）と「水越茅村先生の揮毫を訪ねて」（『郷土ちがさき』122、23・9）に収録された「略歴」に詳しい。石碑に記された揮毫は16点を数える。市役所正面に掲げられている「茅ヶ崎市役所」の看板も氏の手になる。梅二氏の弟。「茅村」や「二朴庵」と号した。詳しくは、没 3 年目に出版された遺墨集『水越茅村遺墨集』(昭和 63・9、巻頭の宇野雪村氏の文は名文といえる)および茅ヶ崎市美術館の企画展の図録『現代書を拓く、水越茅村展』(平成1・1)を参考にされたい。

求められて揮毫した鶴田栄太郎頌徳碑、添田唖蟬坊句碑、沼田頼輔漢詩碑、野崎薫の詞碑、藤間柳庵の碑などはそれぞれに地域の歴史が刻み込まれていて、郷土史の散策には最適なポイントといえる。野に静かに、佇む「野の書」に魅力を感じる。

野崎氏との出会いはどのようなものだったかの想像は難しいが、『ふるさとの寺と仏像』（52・2）、三島神社の「詞碑」（53・10）、『ふるさとの歴史散歩』(58・6)に揮毫が残されていることから、親しい関係を築かれたことがうかがえる。

巻末の写真は、茅村家の庭先での1枚である。左より茅村氏、川城三千雄氏(藤間柳庵研究家、後に、市史編さんの史料調査員、文化財保護委員長を務めた)、野崎氏、山口富三氏(柳島自治会）の順、撮影は藤間雄蔵氏である。

昭和58年11月に柳島の八幡神社に建立された「藤間柳庵の碑」(撰文・川城氏、揮毫・茅村氏）のための揮毫の依頼に訪れたときに撮影された。「義父（野崎氏）がいなかったら茅村氏に揮毫していただくのは難しかった」と藤間氏は回想している。また、川城氏によると、茅村氏は「この様な依頼を受けたことは大変光栄である」と喜んでいたと語った。もちろん、撰文の栄誉を得た川城氏の喜びも大きいものがあったことと想像される。

⑩**篠田貞太郎**氏（十間坂）は、野崎氏の後任の郷土会の第6代会長として活躍した。

自治会で編集発行した『十間坂の郷土史』（昭和60・8）の原稿の依頼から編集まで編集長として取りまとめにあたった。氏の「十間坂のあらまし」「第六天神社の由緒」「戦時下の毎日を憶う」は十間坂の歴史の概要を知る貴重な記録である。

調査・執筆・編集を担当され故人となられた**田中権三・長谷川庄吉・石黒松蔵**編集員らの「関東大震災」に関する証言は貴重といえる。各氏に伺いたいことは幾つもあった。

⑪**重田景次**氏（十間坂）は、斎藤昌三氏編集の『明朗の茅ヶ崎』に「茅ヶ崎変遷史」を、『郷土茅ヶ崎』に「茅ヶ崎交通史」と「学校沿革史」連載し、また、関東大震災に関わる貴重な証言と臨場感溢れる写真を撮影している。その写真は、市の広報紙、学校の記念誌や『茅ヶ崎市史』などに繰り返し掲載されている。号は「岱仙洞」。氏の家は江戸時代に旅籠を営み、脇本陣「江戸屋」の繁栄振りは文人・太田蜀山人(南畝）の随筆に詳しい。明治8年の北陸行幸の折りの「御小休所」ともなり、戦前、庭先には「明治天皇御休輦処」の杭が立てられていた。多くの資料は、**英弘**氏のご協力で活用が図かられ、現在も重田家に大切に保管されている。

なお、柳島の藤間家には 3 幅の太田蜀山人の作品を表装の上大切に保管しているが重田家との関連はいかなるものであろうか。想像を掻き立てられる。

⑫**水嶋善太郎**氏（小和田）は、市の視聴覚教育委員や社会教育委員を歴任した。昭和27年完成の小和田公民館（現在の市立公民館とは違うもの）の建設や青年会での活躍は特出するべきことといえる。青年会の活動は、氏の所蔵する『小和田青年会報』(『茅ヶ崎市史・現代』3収録）に詳細が見える。

昭和25年9月、氏が23歳の時に成稿をみた『小和田郷土物語』は、その後、39年の歳月を経て平成元年7月にようやくその完成を見た。62歳の出版であり、喜びは一入といえよう。

筆者は、給油所を経営する氏が事務所で無造作に同書を手にする姿を思い出すが、時間をかけ、機会を得て発行できた同書に「郷土史とは斯く在る可き」との評価を与えたい。小和田の古代から戦後の青年

会の活動までを詳細に触れ、小和田の地域の研究における必見の文献といえる。貴重な写真も32枚と多く、撮影年も明記されるその資料的価値は高い。「あとがき」には研究者仲間の**程島一郎**氏（茶人、団十郎について造詣が深く、着物姿が印象に残る風流人。一度子規ゆかりの茶碗を拝見する機会を得たが、返答に窮した思い出が残る）への謝辞が記されている。

水嶋氏は請われて地域の公民館などで地域史を講じることが多く、その時のレジュメなども貴重な資料である。小和田の地名には詳しかった。

なお、『小和田郷土物語』の詳細は、藁品彦一氏の新刊紹介を参照されたい。

⑬**藁品彦一**氏（円蔵）は、寒川・横浜及び市域の小中学校の教員を永く務め、茅ヶ崎小学校長を最後に勇退し、のち、茅ヶ崎市教育委員長を一期務めた。詳しくは「藁品彦一先生を偲んで」（『茅ヶ崎市史研究』28、平成16・3）収録の「略歴」や「主な著作・論文・著書」を参照されたい。とくに『茅ヶ崎市史』5（概説編、昭和56・3）の「本文」や「史話」、『ブックレット2、ちがさき歴史の散歩道』（平成12・2）は郷土史を研究する基本書で、レファレンス業務でも不可欠といえる。『ちがさき歴史の散歩道』は5回版（22・12）を重ねて、市史編さん事業における大ベストセラーである。氏の収集した資料は一部市史編さん担当で保管し、活用している。また、『茅ヶ崎市史研究』収録の論文を自ら纏めた『茅ヶ崎市史研究論集』は、氏の業績を一覧するのには有益であり、市立図書館などで活用できる。

藁品氏と野崎氏の関わりを記したい。

野崎氏は地域の活動に積極的に関わることが多く、子息の小学校時代にはPTAの役員として貢献され、PTA 会報への投稿も多い。当時から藁品氏との親交がみられた。併せて町役場の職員だった彦一氏の兄・治介氏とは同級生としてその親交は永く深かった。娘の仲人を頼む仲でもあったという。

また、野崎氏が藁品氏より15歳ほど年長であるのにもかかわらず、藁品氏を先生と慕い、いっぽう、藁品氏は長老として野崎氏を敬いつつ交流する言葉のやり取りの好ましさは、いまでも筆者の耳に心地よく響いている。

野崎氏の最晩年の編著書である蕉風・菊地正平遺稿集『華のうてな』（平成3・2）の表題は、菊地氏をよく知り、一時期茅村氏の門を叩かれた藁品氏の手でなされた。印象深い遺稿集である。

なお、円蔵の鎮守、神明大神の境内には、氏の手になる多くの石碑がたたずみ、氏を偲ぶことができる。

また、教員の先輩として交流のあった書家の水越茅村氏、井上有一氏との学童の書道審査や画家の三橋兄弟治氏との文学などに関する羨ましいエピソードは多い。藁品氏は短歌結社「醍醐」に所属して研鑽を重ねていた。自作の短歌を色紙に認めて書斎で楽しむなど、一時代前の教養人の風貌がみられた。

参考文献

・『郷土ちがさき』創刊号～第123号
昭和46・5～平成24・1　茅ヶ崎郷土会

・『郷土茅ヶ崎』上巻、下巻　昭和48・3，12
茅ヶ崎市教育委員会

・『郷土ちがさき、年表風ちがさき郷土会の歩み』
昭和60・10　茅ヶ崎郷土会

・『創立５０周年記念、郷土ちがさき百号の歩み』
平成16・9　茅ヶ崎郷土会

・『茅ヶ崎市史文献目録1～35』、茅ヶ崎市史編集員会編『茅ヶ崎市史研究』創刊号～第32号および同編『ヒストリアちがさき』創刊号～第4号に収録　昭和52・10～平成24・3　茅ヶ崎市

謝　辞

今回も多くの方のご協力をいただいた。お礼を申し上げたい。

とくに藤間雄蔵氏・克子氏ご夫妻、名和稔雄氏（茅ヶ崎郷土会）、永井武彦氏、辻雅之氏（以上、市文化生涯学習課）、髙橋知氏、須藤格氏（以上、市社会教育課）にはご指導をいただいた。感謝申し上げたい。

（平成24年2月27日）

*1　茅ヶ崎市文化生涯学習課市史編さん担当

野崎薫著作一覧

	発表年月日	表　　題	誌　　名	通巻	発　行　所
1	昭和23. 5. 5	40年の思ひ出	創立40周年記念誌		茅ヶ崎市立第二小学校
	26. 8.21	新しい校舎を仰ぎ見て	学校の竣工に当りて		茅ヶ崎市立鶴嶺小学校
	42. 7.10	20年の想い出	PTA会報	19	鶴嶺中学校PTA文化部
	43.12. 1	表紙の言葉、姥島	更生保護20年のあゆみ		茅ヶ崎地区保護司会
	43.12. 1	回顧	〃		〃
	43.12. 1	あとがき(2氏と連名)	〃		〃
	46. 5.	編集後記	郷土ちがさき	1	茅ヶ崎郷土会
	46.11. 1	編集後記	〃	2	〃
	46.	藤間さんの思い出	藤間善一郎		〃
10	47. 5.31	編集後記	郷土ちがさき	4	〃
	48. 1. 1	年頭随想	〃	6	〃
	48. 1. 1	編集後記	〃	6	〃
	48. 5. 1	鎌倉の史跡を探る	〃	7	〃
	49. 1. 1	茅ヶ崎の海と八松ヶ原	〃	9	〃
	49. 1. 1	編集後記	〃	9	〃
	50. 1. 1	豊作祈念と収穫祭(1)	〃	12	〃
	50. 9. 1	豊作祈念と収穫祭(2)	〃	14	〃
	52. 2.15	あとがき	ふるさとの寺と仏像		〃
	52. 5. 1	ふるさとの寺と仏像の編集を終えて	郷土ちがさき	19	〃
20	52. 9. 1	土地の守護神 ″社日″	〃	20	〃
	53. 1. 1	十五万年前の象の化石	〃	21	〃
	54. 4.	野崎薫さんの話	としよりの話		あしかび
	54. 5.	思い出の記	鶴嶺小学校開校70周年記念誌		鶴嶺小学校
	54. 8.10	街道の歴史	広報ちがさき	303	茅ヶ崎市市長公室広報課
	54. 9. 1	編集後記	郷土ちがさき	26	茅ヶ崎郷土会
	54.10. 1	老人の生き甲斐とは何か	茅老連	5	茅ヶ崎市老人クラブ連合会
	54.12.	堤貝塚発掘現場を見学して	茅ヶ崎の文化財を守る会会報	1	茅ヶ崎の文化を守る会
	55. 3. 1	今年の干支	茅老連	6	茅ヶ崎市老人クラブ連合会
	55. 5. 1	鉄砲道と佐々木卯之助の事跡について	郷土ちがさき	28	茅ヶ崎郷土会
30	55. 9. 1	御挨拶	〃	29	〃
	55.12. 1	伊藤さんと私	伊藤冨美子追悼号		文芸評論社
	56. 1. 1	新年の御挨拶	郷土ちがさき	30	茅ヶ崎郷土会
	56. 6.30	「茅ヶ崎」という地名の出てくる唄	資料館だより	42	茅ヶ崎市文化資料館
	56. 9. 1	佐々木氏記念碑と供養碑移転の経過について	郷土ちがさき	32	茅ヶ崎郷土会
	57. 1. 1	新年のご挨拶	〃	33	〃
	57. 4. 1	みみずのたわごと	茅老連	10	茅ヶ崎市老人クラブ連合会
	57. 6. 1	まえがき	萩園の地名		萩園郷土史勉強会
	57. 9. 1	再任の御挨拶	郷土ちがさき	35	茅ヶ崎郷土会
	57.10. 1	昔からの地名は大事にしたい	茅老連	11	茅ヶ崎市老人クラブ連合会
40	58. 1. 1	新年のご挨拶	郷土ちがさき	36	茅ヶ崎郷土会
	58. 1. 1	弁慶塚を復元する	〃	36	〃
	58. 4.15	神奈川の顔百人の中に選ばれた茅ヶ崎の人々、その一、村野もと子	茅老連	12	茅ヶ崎市老人クラブ連合会
	58. 5. 1	塩川先生の御逝去を悼む	郷土ちがさき	37	茅ヶ崎郷土会

	発表年月日	表　　題	誌　　名	通巻	発　行　所
	昭和58. 6.28	序にかえて	ふるさとの歴史散歩		茅ヶ崎郷土会
	58. 7.10	小和田の七不思議(茅ヶ崎市)	別冊歴史読本、怪奇・謎日本と世界の七不思議	28	新人物往来社
	58. 9. 1	山口金次氏の御逝去を悼む	郷土ちがさき	38	茅ヶ崎郷土会
	58.10. 2	神奈川の顔百人の中に選ばれた茅ヶ崎の人々、藤間柳庵・添田唖蝉坊	茅老連	13	茅ヶ崎市老人クラブ連合会
	59. 1. 1	新年のご挨拶	郷土ちがさき	39	茅ヶ崎郷土会
	59. 1. 1	神奈川の顔百人の中に選ばれた茅ヶ崎ゆかりの人々(野村もと子・藤間柳庵・添田唖蝉坊)	〃	39	〃
50	59. 5. 1	野村もと子家集	〃	40	〃
	59. 9. 1	再任のご挨拶	〃	41	〃
	59. 9. 1	八幡様の松並木	〃	41	〃
	60. 1. 1	新年のご挨拶	〃	42	〃
	60. 1. 1	もと子家集(続き)	〃	42	〃
	60. 5. 1	茅ヶ崎にも博物館を	〃	43	〃
	60.10.13	はじめに	塩原富男編　茅ヶ崎郷土会のあゆみ		〃
	60.10.18	市立図書館魯文展用資料	仮名垣魯文と茅ヶ崎		自　刊
	60.12.15	茅ヶ崎郷土会も訴える	茅ヶ崎に博物館を	3	茅ヶ崎の博物館を考える会
	61. 1. 1	新年のご挨拶	郷土ちがさき	45	茅ヶ崎郷土会
60	61. 1. 1	今年度の文化祭を省みて	〃	45	〃
	61. 7.	農協ちがさき、続連載記事集録版			茅ヶ崎市農業協同組合
	61. 9. 1	退任のご挨拶	郷土ちがさき	47	茅ヶ崎郷土会
	61. 9.25	頼朝の死の謎	別冊歴史読本、特集源義経のすべて	44	新人物往来社
	62. 4.29	満福寺誌			太鼓山満福寺
	62. 5. 1	茅ヶ崎にもこんなところも！	茅老連	19	茅ヶ崎市老人クラブ連合会
	62.11. 1	爽かな朝	〃	20	〃
	63. 1. 1	”茅ヶ崎ゆかりの人物展”を見学して	郷土ちがさき	51	茅ヶ崎郷土会
	63.3.31	思い出の記(鶴嶺小学校70周年記念誌より)	社会科資料集、わたしたちの茅ヶ崎、指導用		茅ヶ崎市教育研究所
	63. 5.28	つるみねミニガイド、ふるさとの民話、きつねの嫁入り	公民館だより、つるみね	12	茅ヶ崎市立鶴嶺公民館
70	63. 8. 6	満福寺誌追補			太鼓山満福寺
	63. 9.30	つるみねミニガイド、ふるさとの民話、亡霊の出た話	公民館だより、つるみね	13	茅ヶ崎市立鶴嶺公民館
	63.10.	文化資料館はこうして出来た	茅ヶ崎に博物館を	16	茅ヶ崎の博物館を考える会
	平成　1. 1.11	安らかに＝野崎安子の思い出＝			自 刊
	1. 1.31	つるみねミニガイド、ふるさとの民話、道祖神とどんど焼き	公民館だより、つるみね	14	茅ヶ崎市立鶴嶺公民館
	1. 8.10	つるみねミニガイド、ふるさとの民話、何時橋	〃	15	〃
	1. 9　1	南湖の左不二の話	郷土ちがさき	56	茅ヶ崎郷土会
	1.11. 1	東海道の名所、南湖の左富士	茅老連	24	茅ヶ崎市老人クラブ連合会
	1.12. 5	つるみねミニガイド、ふるさとの民話、地蔵川のとめぞう	公民館だより、つるみね	16	茅ヶ崎市立鶴嶺公民館
	2. 3.31	つるみねミニガイド、ふるさとの民話、かっぱ徳利と五郎兵衛さん(つづく)	〃	17	〃

	発表年月日	表　　題	誌　　名	通巻	発　行　所
80	平成 2. 3.31	開校80周年に寄せて	開校80周年記念誌		茅ヶ崎市立鶴嶺小学校
	2.4 15	ふるさとの緑を訪ねて			自　刊
	2. 5. 1	御挨拶	郷土ちがさき	58	茅ヶ崎郷土会
	2 .7 .5	つるみねミニガイド、ふるさとの民話(最終回)、かっぱ徳利と五郎兵衛さん	公民館だより、つるみね	18	茅ヶ崎市立鶴嶺公民館
	2.11.8	野崎薫さんに聞く―地域に生きて―	〃	19	〃
	3. 1. 1	御挨拶	郷土ちがさき	60	茅ヶ崎郷土会
	3. 2.24	華のうてな―菊地正平遺稿集―(編集)			菊地重雄
	3.10.6	主催者あいさつ	小生夢坊を語る		小生夢坊を語る会
	4.10.31	茅ヶ崎の郷土芸能	資料館だより	81	茅ヶ崎市文化資料館
	4.10.31	萩園の十五夜	〃	81	〃
90	5. 5.31	萩園のうつりかわり(編集)			萩園郷土史勉強会
	5.10.	古相模川	93文化祭、茅ヶ崎市の「川」展		茅ヶ崎郷土会
	5.10.	小出川	〃		〃
93	21.5.5	開校当時の思い出	鶴嶺小100年、そして明日へ		茅ヶ崎市立鶴嶺小学校

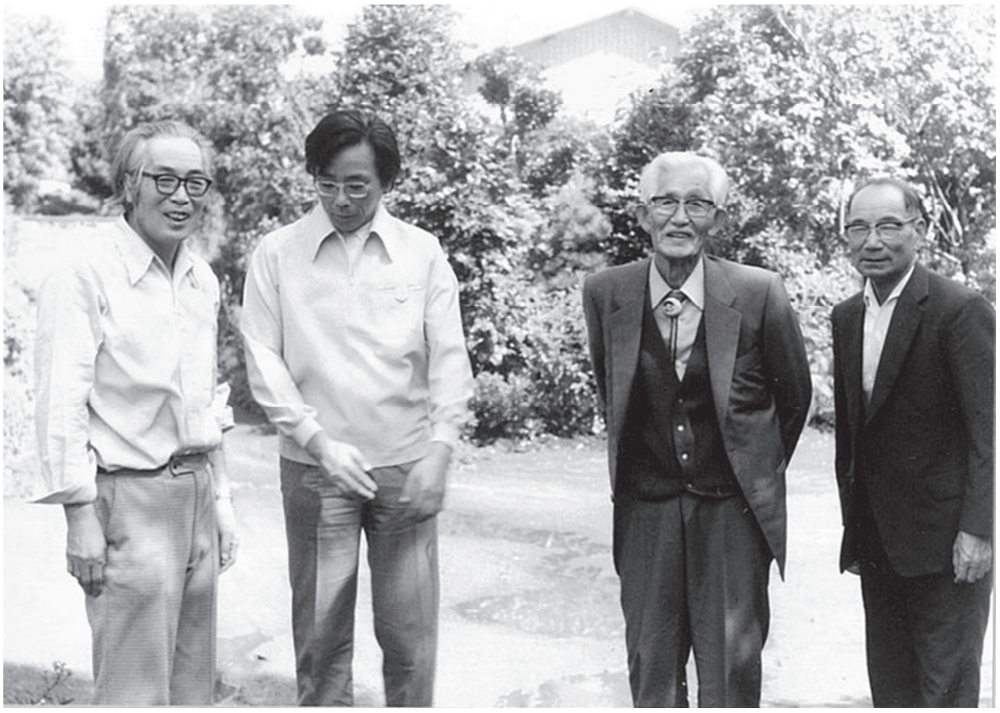
追悼文等

	発表年月日	編 著 者 名	表　　題	誌　　名	通巻	発　行　所
1	昭和 3.11.30		野崎薫(茅ヶ崎の士)	軍士艦(神奈川県版)		帝国軍士艦刊行会
	38. 5.20		野崎薫	永世の宝典、新日本人文禄、自治行政大観		地方自治調査会
	42.12. 5		野崎薫	明治百年記念、郷土を造る人々、自治行政大観		〃
	49. 1. 1		野崎薫さん叙勲	郷土ちがさき	9	茅ヶ崎郷土会
	50. 5.10		野崎薫	自治制80年記念、郷土を造る人々、自治産業大観		地方自治調査会
	51. 3.31		野崎薫氏所蔵資料目録	茅ヶ崎市史資料所在目録	1	茅ヶ崎市史編さん事務局
	53. 3.31		野崎薫氏所蔵資料目録	〃	2	〃
	61.11.21		野崎氏	社会開発プロジェクト情報(臨時増刊号)		社会開発プロジェクト情報研究会
	62. 4. 1		野崎薫	郷土の人国記、自治総合大観		地方自治調査会
10	平成 2. 4.15		野崎薫略歴	ふるさとの緑をたずねて		自　刊
	2. 8. 5			野崎薫さんの米寿と出版を祝う会出版 ”ふるさとの緑をたずねて”		有志世話人
	3. 3.31	藁品 彦一	新刊紹介、野崎薫著『ふるさとの緑をたずねて』	茅ヶ崎市史研究	15	茅ヶ崎市
	7. 1. 1	青木　進	古文書を読む会の便り(2)	郷土ちがさき	72	茅ヶ崎郷土会
	7. 1. 1	臼井　孝之	追憶元会長・野崎薫さんの訃に接して	〃	72	〃
	7. 1. 1	米山千代子	故野崎顧問を偲びて	〃	72	〃

	発表年月日	編著者名	表　　題	誌　　名	通巻	発　行　所
	平成　7. 1. 1	小野間　正	追憶(野崎薫さん)	郷土ちがさき	72	茅ヶ崎郷土会
	7. 3.31	北村　　誠	新刊紹介、萩園郷土史勉強会発行『萩園のうつりかわり』	茅ヶ崎市史研究	19	茅ヶ崎市
	7. 4.20	小生　富夫	野崎薫さんと天狗溝の思い出	ちがさき大山天狗溝かわら版	4	朝倉房治
	16.9.30	塩原　富男	「愛されば、愛される」＝野崎薫さんのこと＝	創立50周年記念「郷土ちがさき」百号の歩み		茅ヶ崎郷土会
20	19.3.31	加藤　　清	茅ヶ崎市史の編さん、野崎薫	茅ヶ崎市史ブックレット	9	茅ヶ崎市
21	24 2.26	平山　孝通	野崎薫茅ヶ崎郷土会元顧問の覚え書き　付、郷土史ゆかりの人々小伝	茅ヶ崎郷土会勉強会レジュメ		自　刊

新聞掲載記事

	掲載年月日	タ　イ　ト　ル　等	掲　　載　　紙	通巻	発　行　所
1	平成　1. 6.	お顔拝借<111 > 郷土史の生き字引一野崎薫さん(87歳)	湘南よみうり(6 月号)	111	湘南よみうり新聞社
	2. 5.24	緑を20年かけ調査、茅ヶ崎の野崎さん(87)が本出版	神奈川新聞		神奈川新聞社
	2. 8. 5	この人「きょう5日、米寿と自費出版を祝福される野崎薫さん」	〃		〃
	2. 8.26	野崎薫さんの米寿と出版『ふるさとの緑をたずねて』を祝う会	農協ちがさき	253	ちがさき農協
5	5. 8.13	地域の歴史一冊に91歳の野崎さん「新しく住む人へ」	神奈川新聞		神奈川新聞社



水越茅村氏宅にて（高田、昭和58年、撮影：藤間雄蔵氏）
（左より、茅村、川城三千雄、野崎薫、山口富三の各氏）